

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 李垠庚

本論文(「羽仁もと子の思想・生活・戦争 近代日本女性キリスト者とその時代」)は、近代日本すなわち明治維新後から戦後へと至る状況において、女性キリスト者・羽仁もと子(1873-1957)が、キリスト教思想を懐きつつ生活をとらえ活動した在り方を、歴史的に遡ってこれを把握し考察した研究である。従来、近代日本キリスト者についての研究は、多くは男性知識人の様態をとらえていく傾向があった。女性キリスト者についても、個別論になるか、ややイデオロギ的前提をもった把握となる傾向もあった。これに対して本論文は、家庭をもつ女性の生活・教育等がキリスト教と結合しながら具体的に方向づけられていく状態をとらえる。羽仁もと子の人生、その雑誌出版・学校教育・会合参加等の活動を辿りながら、そこにキリスト教信仰が展開する在り方をとらえていく。

序章では、本論文の課題とその構成を位置づける。羽仁もと子は、女性キリスト者だが、近代日本女性が日常生活の中で活動する在り方をかなり一般的に示してもいる。これをとらえることは思想史的に重要だが、従来の研究は、羽仁もと子周辺の個別論・女性学・没歴史的把握等にとどまる。しかし、女性キリスト者としてのその活動を具体的かつ総合的にまた歴史的に捉えることこそ必要である。またその問題は、いわゆる十五年戦争期に、とくに状態が集中してあらわれている。だが、それも従来やはり十分捉えられていない。この空白の歴史をこそさらに探り出すべきだと、本論文の課題を方向づける。

第一章「問題意識の醸成と学習の時代」では、羽仁もと子が生まれた青森県八戸での幼年期の環境や家族の在り方、そこでの彼女の先天的・後天的な能力・意識の形成過程をとらえる。上京して巖本善治(1863-1942)による女性教育とその生活に目覚めるが、帰郷後に結婚した離婚する。さらまた上京後、ユニテリアン・羽仁吉一(188-1955)と社内結婚する。そして出産後、『家庭之友』を創刊するが、次女死亡後に改めて「回心」しさらに「信仰」を持ち始める。そこに植村正久(1858-1925)が信仰上の師となる。この羽仁もと子・吉一の家族としての活動は、さらに信仰を成熟させ、『婦人之友』と自由学園という雑誌・教育において、キリスト教信仰の理想を実現せんとする営みとなる。これら従来必ずしも十分とらえられていなかった、羽仁もと子の家族・社会関係と信仰形成の歴史を、本論文はきわめて具体的・実証的に把握している。

第二章「キリスト教思想の受容と独創的な展開」では、第一章の内容にさらに思想的に踏み込み、キリスト教徒としての具体的な体験を背景に、神また天国の信仰が形成される状態をとらえる。それは、教理や教会の伝統に依拠することなく、さらに宇宙・万有の生命の一部としての自己自身とあらゆる生命への愛への意識であった。またそこでは、天地

草木にも神のみ業があり、それに人間としての自己の啓発、進化・進歩が結合する。その際、羽仁もと子にとって、死や罪や悪は、神人関係の本質や原罪となるものではなく、人間生活上の倫理となり、生活改善の動機になる。それが自主・自由・独立の人生の営み、また同情・協同を説く家庭・生活また教育論となって、一貫して彼女によって説かれ続ける。さらに第一次世界大戦後は、民族としての「日本」を、「大きな生命」への通路として位置づけもする。このあたりの把握は、大きくは近代日本に流れる「生命主義」の流れに繋がるものでもあり、高く評価できよう。

第三章「キリスト教思想に基づく生活と教育」は、以上のようなキリスト教思想が、いかに生活・教育上の実践となって展開するか、その様態を、昭和初期まで具体的にとらえる。それは、中流家庭における婦人の修養であり、また家庭における出産・育児・食事・運営・家計簿・行事など、当時における健全な生活様式の形成であるが、それが、みずからを社会的に成長させる自由学園の理念と活動となり、さらに全国組織としての理想社会構築への働きにもなる。これらがまた持続する日本共同体をつくる活動となる。このような形成史を本論文は具体的にとらえる。

第四章「15年戦争期の活動と戦争協力」では、以上の羽仁もと子の活動が、1931年、満州事変以後、また1932年世界新教育会議の参加以後、天皇崇拜の国体論に結び付き、キリスト教信仰がこれに習合する方向をもつに至ることをとらえる。そこには様態としては、天皇を戴く「家族主義」があり、また「東亜を導く使命」観のもとでの戦争協力活動があった。とくに1937,38年頃から、羽仁もと子は、「国体」「家族日本」に関する文章を次々と書き、国民の力をヒットラー、ムッソリーニが率いる能力に比して評価さえる。それがさらに銃後の生活改革・戦争協力となって展開し、男子部の創設(1935)、友の会の「奉公運動」(1937)、また北京生活学校の設立(1938)といった活動となる。これら、十分知られていなかった戦時中羽仁もと子の活動を、本論文は具体的に見出し位置づけている。

終章「戦争経験と戦争責任、今後の展望」は、羽仁もと子の活動、とくに15年戦争期の営みが、その後、どのように認知されていったか、その状態をとらえる。羽仁もと子は、戦時中、終戦近くまで、欧米からの資本主義・帝国主義・科学万能主義は私利私欲であり、戦う敵であるとし、これへの勝利の念願・誓いを語り続けている。戦後になると翻って、「敗戦国」における「悔改め」を通じての新日本の道を模索する。とはいえ、天皇への畏敬はつよく持続するし、その新日本の「道」の内容は十分語られてはいない。羽仁もと子は、やがて老年、夫・吉一の急死に出会い、それ以上の表現なくして亡くなる(1957)。

この「沈黙」をめぐる、本論文は、類比して、日本キリスト教団において、戦争協力問題への取り組みが、1967年以後、対韓関係によって漸く始まったことを指摘する。では羽仁もと子自身についてはどうか。筆者は、その「摂理信仰」(大貫隆)が、罪を忘れ進歩を目指すものであること、また社会的組織としては「心情倫理」(ウェーバー)による活動の体系であること、罪責論においては、「形而上的な罪」(ヤスパース)に関与しないものであること等を指摘する。ここでは、少なくとも田辺元(1885-1962)のような懺悔道は語

られていない。それゆえ、羽仁もと子は人々にその後も課題を残したままである。

ただ、元来のキリスト教は、「救済」のみならず、「救贖(罪の贖い)」をするものであり、その点においてこそ、羽仁もと子は、後世に課題を残している。しかしまた、羽仁もと子の家庭・教育・生活・宗教論は、それが解体されている現代にこそ、そのグローバルかつ具体的な形態の構築にむけた可能性をもつ。この二つの問題を最後に示唆する。

以上のように、本論文は、従来、個別的な関係や関心は持たれても、その把握は不十分であった女性キリスト者・羽仁もと子の人生と生活の有り様を、その誕生から戦時・戦後まで、また大きな社会的組織の在り方として、追ってこれをとらえる。この研究は、近代日本の女性キリスト者の家庭・教育・社会等の在り方を、地域文化史的に位置づけており、それは従来の空白を埋めたものとして高く評価できよう。

またその内容について、羽仁もと子における神また倫理が、進化的創造論を背景に家族的國家論を形成するとき、権力に対して批判をもたず、天皇との関係を乗り越えることが出来ず、また罪意識も深まることなかった。結局、戦時期には戦争協力の活動をし続けたが、この問題は戦後も空白のまま残存することになった。このような重要な指摘は、韓国キリスト教を背景にもつ李垠庚氏にしてはじめて、はっきりとらえたものと言えるかもしれない。その倫理的・宗教的な意味においても、本論文の意義は大きい。

とはいえ、いくつかの問題が残る。使用する雑誌・テキストの信憑性の吟味に不十分さが残る。それらが、そもそも羽仁もと子自身のものか、羽仁もと子像の表現なのか、あるいは、とくに戦時期における検閲をどこまで経た出版なのか。そのあたりに遡及すべき問題が残っている。ここにさらに入っていくことが、可能ならば必要であろう。

またその思想内容の把握について、羽仁もと子の、進歩と結び付いた「摂理信仰」というべき歴史観が本当に何なのか、また戦後どう位置づくべきなのかも問題となる。またその「罪責」について、本論文は、ヤスパースの罪責論によって基礎づける。しかし、羽仁もと子と同様、著者自身キリスト者であるならば、「罪」の内容を、より聖書をも参照しながら、位置づけ・類型化してとらえることが必要だろう。また哲学的にも、羽仁もと子に大きく流れる生命観が、自然内在主義であるならば、これをいかに捉え乗り越えるべきか、問題が残っている。

以上のように問題は残存する。けれどもこれらは当該の論文・研究を越え、そもそも学者・研究者にも問われ続けるものでもある。もとよりそれは本論文の意義を失わせるものではない。本論文は、羽仁もと子という、近代日本の家族・社会等の形成において重要な働きをしたが、従来十分に歴史的に位置づけられていなかった思想家を、きわめて具体的にまた歴史的に、またその空白であった戦時期の在り方にまで踏み込んで、さらにとらえている。またその近代日本のキリスト教思想の天皇制との関連も指摘している。これらは、きわめて創造的な営みであり、今後の研究の問題としての可能性や方向を示すものでさえある。本論文は、当該研究分野において画期的な地平を開くものであり、博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものであると認定する。